

CROSS ROADS

VOL. 06

2020年10月30日

はじめに

永滝 稔（有志舎代表取締役）

〈著者エッセイ〉

私にとっての「ベ平連の時代」

平井一臣（鹿児島大学教授）

〈Bookエッセイ 高円寺・コクテイル書房の日々④〉

私たちの小さな歴史

狩野 俊（コクテイル書房店主）

〈私が見た戦前の中国・台湾⑥〉

銃撃戦の洗礼を浴びる

永滝 勇（有志舎取締役）



はじめに

永滝 稔

秋10月です。「読書の秋」でもありますね。

さて、ここに『CROSS ROADS』第6号をお届け致します。

本号は、『ベ平連とその時代一身ぶりとしての政治』の著者である平井一臣さんにエッセイをご執筆いただきました。平井さんと私・永滝はほぼ同世代なので、ベ平連や当時の社会に対する印象などが重なるところもあり、結構、面白がりながら本をつくりさせてもらいましたが、ベ平連が示した「人々が声と動きを通して政治に働きかける」という民主主義の原点を、現代においてもう一度思い起こしてみてもよいのではないかと思う次第です。

また連載「コクティル書房の日々」はいよいよ最終回です。コクティルのお隣にある「薔薇」さんとの心温まるお話。私の子どもの頃にはどこにでもあった「ご近所」の世界が今も残っていることにホッとしました。

そして、永滝勇の「連載 私が見た戦前の中国・台湾」は、かつて北宋王朝の都であった開封に到着し、そこで強烈な戦争の洗礼を受けてしまう話です。

「天高く馬肥ゆる秋」ですね。食べ過ぎには気をつけないと…。

戦争・革命の東アジアと日本の「ミニスト」1970年
黒川伊織著 東アジアのコミュニストは、戦争と革命の20世紀をいかに生き、いかに出会い、そして別れていたのか。もうひとつ日本共産党史！ 2800円

ベ平連とその時代 身ぶりとしての政治
塙川伸明著 ロシア革命とそれによって生まれた「ソ連」という特異な国を歴史的展望の中で検討し、「現存した社会主義」と冷戦の終焉について考える。 2800円

歴史の中のロシア革命とソ連
平井一臣著 「身ぶり」を通して人びとに戦争を訴え理解や共感を広げていくことを試み、新しい政治空間を模索していくたべ平連の運動を現代史のなかから描き出す。 2800円

異郷と故郷 近代ドイツ・ルール・ボーランド人 [改訂新版]
伊藤定良著 差別と排外・偏見の歴史を振り返ることで、それを乗り越え、共生への道を模索する。旧版に加筆・修正を施した「改訂新版」の刊行！ 2800円

イラン現代史 従属と抵抗の一〇〇年 [改訂増補]
吉村慎太郎著 イランの本当の姿を知るために！ 初版に改訂を施し、さらには二〇〇〇年から二〇一九年に至るイラン政治と国際政治の激動に因襲する新章を加えた新版。 2400円

パレスチナ／イスラエル論
早尾貴紀著 自民族中心主義・ヘイトクライムという暴力の極限にあるパレスチナ／イスラエルを、日本も含む近現代世界史の文脈のなかで論じ、世界と日本を問いかけて。 2600円

東アジア発、新しい「知」の創出に向けて！ 各3600円

講座 東アジアの知識人 全5巻

① 比較史の視点から、近現代100年にわたる思想の歩みを再考する！

② 文明と伝統社会 ③ 「社会」の発見と変容
19世紀中葉～日清戦争
韓国併合～満洲事変

④ 戦争と向き合つて ⑤ さまざまに戦後
白清戦争～韓国併合・辛亥革命
満洲事変～日本敗戦
日本敗戦～1950年代

有志舎 〒166-0003 東京都杉並区高円寺南4-19-2、クラブハウスビル1階（表示価格は税別）
TEL: 03-5929-7350 FAX: 03-5929-7352 <https://yushisha.webnode.jp>

私にとっての「ベ平連の時代」

平井一臣

1968年の春、私は初めて東京にやって来た。南九州の地方都市から北海道の田舎町への夜行寝台を乗り継いでの大移動の途中。東京に住んでいる叔母のアパートに一泊し、翌日上野駅から北へと向かった。初めて見る東京は別世界だった。私がそれまで住んでいた地方都市は人口10万人を超える都市だったが、家の周辺の道路は砂利道で、農耕用の牛や馬がノンビリと往来し、夏になると路上の糞が風に舞っていた。東京は違った。入り組んだ細い路地まで舗装されていた。テレビをつけるといくつものチャンネルが映った。4年前に行われた東京オリンピックに間に合わせるための突貫工事の結果などということは、当時の少年には知る由もない。

それから5年後の1973年春、今度は北から南への大移動。その途中で再び東京に立ち寄った。5年前のような驚きはなかった。人口1万5千人の田舎町からすれば大都会には違いないのだが、冬季オリンピックによる札幌の街の急激な変貌ぶりを間近で見たこともあったからか、別世界という感覚はなかった。その間の1970年に開催された大阪万博は、田舎町の少年にとってはどこか遠い世界の出来事だった。一方で、万博で話題を集めた月の石を持ち帰ったアポロの月面着陸は、小学校の教室のテレビで見た。様々な出来事と自分自身との距離感が測りがたい奇妙な世界、そんな感覚をもったものだ。

拙著『ベ平連とその時代－身ぶりとしての政治－』が扱った時代は、時代の大きな変化のウネリを肌で感じた少年の記憶と重なっている。ベ平連が活動を展開した60年代後半から70年代前半にかけての時代は、変化がスピーディだったばかりでなく、変化の諸相も幾重にもわたる重層的なものだった。したがって、この時代にどのような立ち位置にあったかで、時代イメージも随分と異なるものになったよう

に思う。本書の出版後、かつて地方の国立大学で全共闘系の運動の真っ只中にいた知人から長文の手紙をいただいた。読後感として記されていたのは、自分自身の体験を通した時代イメージとのギャップであり違和感だった。ちょっとした立ち位置の違いが、その時代への関わり方の違いにも結びつき、行動のあり方の違いともなって現れる。こうした複雑な時代相のなかでベ平連というユニークな市民運動の立ち位置は一体どこにあったのだろうか。本書で三島由紀夫や佐藤栄作の言動を交えたのは、こうした問題意識からだった。

少年だった私は、その頃、ベトナム反戦の運動が行われていることも、全国の大学で学生たちが叛乱をおこしていることも、ほとんど知らなかった。記憶の縁に残っているのは、ベトナム戦争関連のニュースを茶の間で見ていた母親が、「やだな。2度とやだな」と呟いたこと、そして、三島事件の日、自衛隊員だった父親が「何を考えてるんだ」と冷たく突き放すように言ったことくらいだ。父親の職業からも分かるように、私の家庭は保守的な家庭だった。とは言え、戦前生まれの両親のように戦争を経験した世代特有の嫌戦意識はまだ濃厚にあったように思う。

ベ平連の運動、とりわけその初期の運動には、そうした日本社会における戦争経験に根差した嫌戦意識が色濃くでていたように思われる。それはニューヨーク・タイムズへの意見広告運動に寄せられた手紙を収めた『平和を呼ぶ声』によく表れている。しかし、戦争にまつわる記憶を押し流し覆い隠す急速な消費社会化、大衆社会化が進展したのもこの時期である。こうした二つのベクトルが交錯する時期に、ポジティブな反戦平和運動はどのような形をとり得るのか。それを追求したのがベ平連の運動だったようだ。

では、50年前のベ平連の運動を今日考える

意味はどこにあるのだろうか。

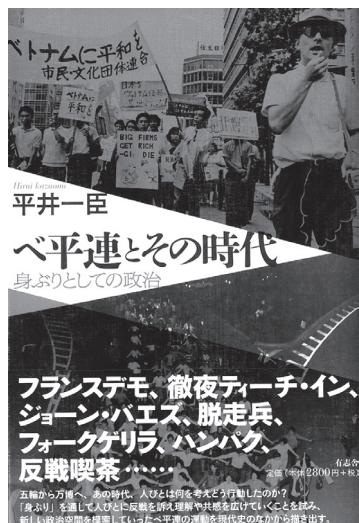
1970年代以降の「デモなき時代」と言われた日本も、福島第一原発事故以降、反・脱原発や安保法制問題などで、かなり大規模なデモや集会が行われ、それなりに注目を浴びた。安倍長期政権に対しツイッターでの批判が拡大し、それが一定の影響力を与えたことは記憶に新しい。「デモなき時代」はそろそろ終わろうとしているのかもしれない。しかし、果たしてそうなのだろうか？ 勤務する大学のオンライン授業で、zoomの投票機能を使用し、受講生に「デモを見たことがあるか？」と尋ねてみたところ、半数以上が「ない」の回答だった。「デモに参加した」ではなく「デモを見た」かどうかである。少なくない学生にとって、デモは日常の光景ではなく、どこか遠い世界で起きている出来事なのだ。

思い出すのは4年前の2016年11月、研究会のためにソウルに行った時のことだ。ちょうど朴槿恵政権に対する韓国世論の批判が高まり、キャンドル集会が毎週行われていた時だった。韓国人研究者に、ちょっと見学に行っても大丈夫かなと尋ねると、大丈夫ですよ、ぜひ見に行ったらいい、と勧められた。夕暮れ時、集会場に向かうデモ行進の声が聞こえ

てきた。すっかり日が暮れた後、同僚の教員と一緒に集会場に向かったが、集まった人の多さと熱気に圧倒された。若者はもちろん、小さな子供を連れた家族の姿もあちこちに見られた。おかしいと思ったことに声をあげ行動を通じて意思表示をする。それは特別なことではなく当たり前のことだ。そこには民主化を自ら勝ち取った韓国社会の自負心のようなものがあるようにも思われた。もちろん、韓国政治を美化したいのではない。しかし、少なくとも、人びとが声と動きを通じて政治に働きかけるという、デモクラシーのプリミティブな在り方がそこにはあるようにも思った。

ベ平連の運動のなかで人びとが模索し試みたことのなかには、デモが特異なことでも突飛なことでもない社会を引き寄せるための様々なヒントが埋め込まれている。私にとって「ベ平連の時代」はそういう意味をもっている。アメリカ全土でBlack Lives Matterのプラカードを掲げた人種差別反対のデモが拡がるニュースを見て、改めてその思いを強くしている。

Information



『ベ平連とその時代一身ぶりとしての政治』

平井一臣 著

四六判、ハードカバー

350ページ

定価（本体 2,800円+税）

ISBN978-4-908672-41-5

私たちの小さな歴史



狩野 俊

今年の春、コロナウイルス禍の真っ最中に、お隣のソバ屋「藪壽麦」のお母さんが、大腿骨頸を折り入院した。日本で初めて、東京タワーのてっぺんに出前を運んだのが自慢のお父さんは、街の名物おやじで、自ら「親分だからな」と大きな顔をしているが、その実すべてを整え、動きやすいように下ごしらえをし、店を取り仕切っていたのはお母さんで、その手の上で気持ちよく裸踊りをしているのがお父さんだということは、街の人すべてが知ることだった。

隣でつぶさに生活と商いを見ていたものとしては、一人で店を切り盛りできるはずもないのは知っていたし、街に人がいなくなったこの非常時に、店を閉めざるをえない状況に追い込まれる可能性さえ感じられ、しばし鬱な時間を過ごしていた。「なんか読むものが欲しいってよ」と病院から帰ってきた元気のないお父さんから伝言を聞いて、家にある「剣客商売」のマンガ版、「御宿かわせみ」の文庫など数冊を選び、病院にかけつけた。隣の区にある総合病院は、コロナの影響で面会も出来ず、職員の方に本を託すほしかった。お父さんによれば「喜んでいたよ……。ありがとな。マットの上で滑って、骨なんか折りやがって。心配かけてごめんって、言つてた」。普段の表情とは一変した気弱な表情には、かすかに涙が滲み、聞いているこちらの目元もじんわりしてきた。

思えば、このひとたちがいなかつたら、わたしたち家族の今がなかつたかも、というのは大げさではない。子供が生まれて三か月から今の店を初め、私が子供を抱っこ紐で抱えながら酒をつくり、その横で妻がつまみを揃えていた。カウンターの中は、今時珍しい昭和の家族の情景があった。とは言つても、子供はぐずり、おむつは湿る。そんな時に「どうしたの赤ちゃん大丈夫」と顔を出し、自分

の店に連れていいき、おしめを替え寝かしつけてくれた。子供は「やぶしい」「やぶばあ」と呼び、実の祖父と祖母のように懐き、「うちの子は父方、母方、藪方と6人の祖父母がいるんです」という笑い話はほとんど本当のことだ。こんな濃厚な関係を築かせてもらったのも、今という時代からすれば、珍しいことだと思う。

お母さんは、空いた時間には、大きな茹で窓の横に座り、よく本を読んでいた。時代ものが好きで、店の横にある「まちのほんだな(無料交換棚)」から、池波正太郎や、藤沢周平、平岩弓枝などを持って行き、読み終わると戻してくれた。「これ友達にもらった本だけど、良かったら使って」と、お母さんは本の補充もしてくれた。

私の歳では「サザエさん」でしか見たことがない、お勝手口の付き合いを実際にさせてもらっている。営業中に何かがなくなると、裏から声をかけ「卵を貸してください」というと「いいわよ、何個」と出してくれる。きゅうり、たまねぎ、にんじん、油揚げ、ソースにケチャップ。品数が多い、藪さんの冷蔵庫にはたいがいの物が揃っている。うちに来てお酒が回り調子が出ると「まかせなさい、地震が来てもほとんどの食料はそろってるから、お前ら全員面倒みてやる」と若いお客さんに胸を張る。ほんとう、ありがとう、そのときは絶対に来るね!という女性の手をぎゅっとにぎるのも藪さんなのだ。

煮物を火にかけながら出かけ、ちょっと遅く帰ってくるとガスが止まっていた。「煮汁が少なくなっていたから止めといたわ」とお母さん。煮詰まった匂いを逃さずに、ガスの火を止めてくれる。もちろん、裏口の鍵は開きっぱなしだ。

息子は母親に怒鳴られると、藪さんの厨房に逃げ込んでいた。甘いもののありかも熟知

し、商売物の蕎麦まで食べさせてもらえるお隣は、彼にとって理想郷で、そこはまるで甘え放題のお母さんの膝の上のような場所であった。

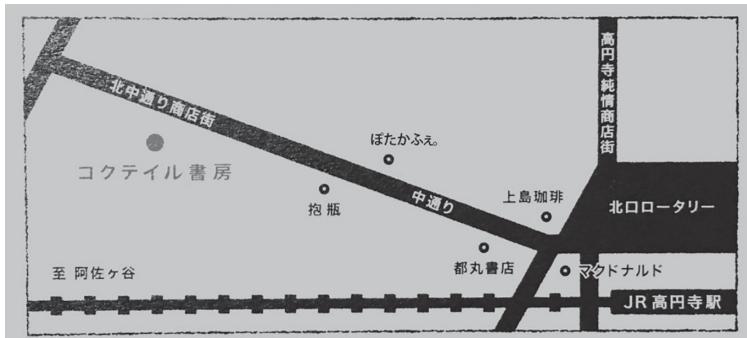
術後の経過も良好で、近いうちに退院できるとなると、しゅんとしていたお父さんも調子が出てきて、鬼のいぬまにと、昼から酒盛りを始めた。世はコロナ自肃真っ最中にもかかわらず、どこから噂をきいたのか、暇をもて余した人々のたまり場となり、日の高いうちから嬌声が聞こえ、しまいにはカラオケまで持ち込み、歌声まで響かせるようになった。飲みなれないお酒に回った、品の好いおばあさんが、路上で動けなくなる姿も何度か見た。これはこれでコロナ禍の高円寺の記憶すべ景色のひとつであり、ガキ大将「藪蕪麦」のお父さんの思い出として書き残しておきたい。

今私の、この二人よりも近しい、血を分けた身内は、実の母親くらいだろう。良い悪い嫌な気持ちも、いっしょになって、二人に張り付いている。これが愛というものかもしれない。東京が好きになったのも、高円寺

がふるさとのようになったのも、人とつながったのが最初で、その人たちと共に住む、この街が好きになったからだ。わたしたち家族のこんな思いが将来、息子の子供たちに伝わった時に、そこに小さな歴史が生まれるのかもしれない。愛の小さな歴史は、血のつながりを超えることを、私はこのふたりから教えてもらった。

お店紹介

古本とお酒と肴（作家や文学作品にちなんだ料理）を商っております。古本屋の仕事は、本を売ることですが、本を買うことも、とても大事なことです。本は読者を得ることで、再び生き返ります。どうぞ当店に本をお売り下さい。コクテイル書房 電話：03-3310-8130 メール：cocktailbooks@live.jp ホームページ URL は、<http://koenji-cocktail.info/>



銃撃戦の洗礼を浴びる

永滝 勇



兵隊たちに先導されて入った開封の城門の中は、広い通りが真っ直ぐに延びており、両側には中国らしい赤や青の極彩色に塗られた家並みが続いている。着いたのが夜半ということもあってか、さすがに寝静まつていて人っ子一人いない。

小型のトラックが止まっていて、その荷台に乗せられた私たちは、しばらく走って目的地である華北電電公司の官舎前に着いた。官舎と言っても、かなり広い敷地にレンガ塀が張り巡らされており、入り口の前には城門と同じように土嚢が積まれ、緊張した兵隊が数人顔を覗かせていた。当時の開封は日中両軍が戦う最前線の一つらしく、華北電電は陸軍のために電信線を敷設し軍事通信をも担う国策会社であり、父は電信技師として開封支社に赴任したのである。でも、5歳の子供であった私にはそんなことは分からなかったので、大変な所に来てしまったという感があり、大連に飛んで帰りたくなったのを覚えている。

ともかく官舎の部屋に落ち着き、休もうという事で布団にもぐり込んだのだが、どのくらい寝ただろうか。突如、外が騒がしくなり遠くの方で雷鳴のような音がする。いつの間にか父は予め支給されていた国防服に身を固めて外に出て行った。大人たちの怒鳴り合うような声に混じってバリバリバリッという激しい音、時折、ヒュルルーンという鋭い甲高い音がすぐ近くで聞こえてくる。後はもう何か分からぬがこれらの音が入り混じって、だんだんと大きくなってくるのだ。母は私を布団の中に包みこんでその上に突っ伏しているようだ。戸外は日本語と中国語で怒鳴りあうような人の叫び声が交叉し走り回る足音に、私は訳も分らず布団の中でブルブルと震

えているばかりだった。あとできいた事だが、この時は中国軍の夜襲があり、それを迎撃する日本軍との間で戦いになったということだった。列車の到着があと少し遅れていたら、と思うと背筋が寒くなる。

さて、戦いが始まってからどのくらい経つんだろうか、気が付いてみたらあの激しい銃撃音と人の声はまったく聞こえなくなつて窓の外から薄明かりが差し込んでいた。夜が明けたのだ。

やがて、父が帰ってきた。汗みどろで顔面蒼白、新品の国防服は泥にまみれていた。気丈な母は、今にも泣き出しそうな顔を必死に食いしばって父が服を脱ぐのを手伝い、寝巻きを着せている。倒れるように布団にもぐり込んだ父は、すぐに鼾をかいて泥のように眠り込んでしまった。

私は母の懷に飛び込むようにしがみ付くと訳も判らずオイオイと泣き出した。母も私を固く抱きしめると、はじめて声を殺して泣いたのだった。それはあまりにも強烈な開封第一夜の洗礼であった。

翌朝、といっても昼ごろになっていたかもしれないが、私たちは同じ敷地内にある華北電電の職場に案内された。そこには日中併せて四、五十人の社員が働いており、狸のような顔をした日本人の支社長が私たちを紹介してくれた。殆どの人は、昨夜、一緒に走り回っていた父と顔馴染みになっており、とても好意的な眼で見てくれていたようだった。

こうして「北支」開封での生活が始まった。私たちは着いて早々、中国軍の襲撃という大変な洗礼を受けた訳であるが、開封は常にこのような危険な状況にある街ではなかったという事が次第に分って来たのは何ヶ月か経つからであった。

© 有限会社 有志舎

〒166-0003 東京都杉並区高円寺南 4-19-2、クラブハウスビル 1 階

TEL 03-5929-7350

FAX 03-5929-7352

mail : yushisha2005@gmail.com

URL : <https://yushisha.webnode.jp>

DTP…言海書房

無 料
(禁転載)